

4 日目 10月20日（九月二十二日）

測地・中田村（天草市新和町）

宮野河内村（天草市河浦町）

泊地・宮野河内村（天草市河浦町）

《測》朝曇天。

手分けして測量。

【伊能隊】（後手）伊能、下河辺、青木、良助、平助。

中田村新田堤より始める。

宮野河内村松崎（人家）、泊浦まで測る。（8・8 km、

鼻方内141 m）。

先手と合流。

【坂部支隊】（先手）坂部、永井、上田、長蔵。

宮野河内村中網代より始め逆測。

宮野河内村及び船津、西高根、を過ぎて泊浦で合流。

（6・9 km）

両隊とも、12時前宮野河内村へ到着。

本陣・庄屋池田伴三郎。

脇宿・同隠宅

※仮主宮内村中村清右衛門。

面会。

宮野河内村組合

牛深村庄屋長岡記七郎

魚貫村庄屋佐々木覚右衛門

亀浦村庄屋倉田武左衛門

この夜大曇り。測量できず。

※仮主宮内村中村清右衛門の意味不明。ちなみに中村清

右衛門は、上島の宮田村庄屋。

《巡》暁から晴れ、8時頃より曇り

5時より二手に分かれ出発。伊能様隊は新田土手より

測量、宮野河内村中網代まで測量、15時頃済む。

坂部様隊は、先手にて測量。宮野河内村泊まり。

晩は曇りのため天文測量は中止。

伊能隊と坂部隊の二手に分かれて測量することがほとんどである。《測》には、先手や後手が使われているが、隊という用語は使われていない。しかし分りやすくするため、

ここでは隊という表現をする。

5日目 10月21日(九月二十三日)

測地・宮野河内村 (天草市河浦町)

深海村 (天草市深海町)

泊地・深海村 (天草市深海町)

《測》朝曇天。

【伊能隊】 (後手) 伊能、下河辺、青木、箱田、平助。

7時出発。

深海村中網代より始める。上平 (人家多し)、下平 (人家多し)、二股、先手測量始点まで測る。(11km)

14時深海村着。

【坂部隊】 (先手) 坂部、永井、上田、長蔵。

6時前宮野河内出発。

宮野河内産島一周測 (5・4km、他にマテ島遠測)。それより、深海村内、下平二股より始め、深海村本陣前まで測る (2・7km、合計8・1km)。

13時深海村着。

本陣・庄屋橋口嘉左衛門。

坂部宿・祐助。

下、青、永宿・民蔵。

この夜曇りで測量できず。

※マテ島とは下馬刀島のことか。

《巡》曇り

5時より二手に分かれ出発。伊能様隊は中ノ網代より下平二股まで済む。坂部様隊は産島廻りを済ませ、下平の二股より役座下まで済む。

(測量隊から注意を受けた代官藤本恕助は、九月二十一日付けで、各組各村の大庄屋庄屋当てに、次のような触れを出した。)

「測量力所のところどころに、間数付き境目印等を立ててあるが、測量に目障りになるので、撤去するよう。この測量は間数改め、村境の調査ではない。したがって、以後心得違い無きよう申し付ける。」

〈測量方御用道具〉

伊能勘解由様お荷物分

御証文長持 1 棹 人足 30 人

白木小長持 1 棹

長持の小付 遠目鑑 1 箱 人足 6 人

象限儀 1 つ 人足 8 人

象限儀柱 但し筵包 2 包 人足 16 人

桃灯 (提灯?) 長籠 1 つ 人足 2 人

鎖入吹 かます 1 つ 人足 2 人

絵図板 一枚 人足 4 人

但し、小絵板二枚足共に荷物小付きあり

大皮籠 12 人足 48 人

柳籠 5 つ 人足 4 人

跡付大小 3 つ 人足 3 人

御座吠 2 つ 人足 2 人

下駄袋 1 つ 人足 1 人

火鉢箱 1 つ 人足 1 人

桐油包箱 1 つ 人足 1 人

陣笠但し袋入り 1 つ 人作 1 人

駕籠 1 挺 人足 8 人

郡中通し 4 挺のうち

駕籠 3 人足 12 人

≈ 150 人 (149 人?)

坂部様青木様永井様下河辺様分

大荷明 (明荷) 12 人足 48 人

跡付 4 つ 人足 4 人

柳こうり大小 6 つ 人足 4 人

定木箱 1 つ 人足 1 人

御座吠 5 つ 人足 5 人

駕籠 1 棹 人足 8 人

鋏箱 1 荷 人足 3 人

下駄袋 1 つ 人足 1 人

竹馬 1 つ 人足 1 人

小道具持 人足 5 人

≈ 80 人

御代官様お荷物駕籠共 16 人

長持 7 棹 人足 42 人

皮籠 2 つ 人足 12 人

桃灯台 1 つ 人足 4 人

椀箱 1 荷 人足 2 人

≈ 60 人

人足 10 人 郡中竿取荷物

同60人 添夫昼食持共
合計376人(375人?)

〈長島への通達〉先だって、浦々測量の際申し入れて
いる通り、天草測量に必要となる、幟を建てるよう申
し入れる。かつ明22日深海村出立、久玉村泊まりの間
に、その幟を建てた個所の案内のため、村庄屋にも二
人ほど差し出すようにも申し込む。

10月21日 測量方 ㊦

薩州長嶋

年寄

郡廻り 中

蔵本村庄屋

(郡見回りとは、地頭任命になる郷所役の一つで郷内の
行政に関与した(下甕島郷土史)。(巡廻日記解説)

〈宿所〉

伊能勘解由様上下10人 深海村庄屋宅
坂部貞兵衛様上下2人 同村和三次宅
下河辺様、青木様、永井様上下6人
同村兼助宅
御代官様上下3人 同村祐助宅

郡宿 同村松蔵宅
荷宰領 庄九郎、竹四郎 同村嘉平宅

中原酒井今晚、久玉へ行く

〈観測〉今晚空曇りのため天文測量中止

注意を受けたのは、地元の村役人の勘違いと勇み足にあつた。それは、村役人は、測量のために良かれと思つて立てた目印が、測量のためには却つて目障りになるというものである。これまでの村人の測量と、伊能測量は全く質が違ふということがよく分かる、両者のすれ違いであつた。

測量方御用道具は長々と、諸荷物とそれを運搬する人足数が書かれているので、そのまま記した。今では、荷物の名前からどんな荷物か理解できないものも多い。少しでも知ろうとネットなどで調べてみたが、わからないものも多い。

また、荷物も現在の測量と比べたら段違いに多い。したがつて、それを運ぶ人足も、合計376人と、想像を絶する多人数だ。この人足については、忠敬の日記からはうかがい知れない。(どこかに記載があるかもしれないが)

測量隊だけでなく、代官の荷物を運搬する者だけでも、

16人を必要としている。さらに、代官の付け人も巡廻日記から推測すると2人いたようだ。

荷物には、測量に必要な物と、生活用品として次の宿泊地に運ぶものがあつたと思うので、この人足全員が、測量に付き従つたとはいえないだろうが、それにしても、測量隊の数倍の人員が、荷物運びで従事していたのは間違いない。

また、人足という言葉は、現在では差別用語という意見もあるかもしれない。しかし、当時は人足と表示していたので、そのまま記す。

トラックのない時代とはいえ、人足は数人程度と思つていたので、宜珍の几帳面な記録のおかげで、受け入れる方にとっては、いかに大変なことであつたかがよく分かる。これを手配する村方も戦争みたいな騒動だつたように思える。

宿にしても、6軒も必要としている。いや、人足達の宿まで入れたら、どれだけの家を必要としたのだろう。宿は今日でいう民宿だが、宿を提供する家族も、その接待に大変な目と、身分が高い人の受け入れに、大変な緊張を強いられたことだろう。

この人足衆は、同一人がずっと従事したのか、あるいは、次々と後退したのか、この宜珍日記からは分からない。宜珍さんも、せっかく後世の我々らに、貴重な史料を残して下さつたが、でもさらに、もう少し詳しく記録して戴けたらと残念な気もする。ただ、宜珍さんも、自分の没後、自分の記録が活用してもらえらるとは、思つてもいなかったかもしれないし、かつ社会の変化が、自らが生きている社会と、とんでもない変化をするとは、想像もしていなかっただろう。したがって、それを宜珍さんに求める方が酷かもしれない。

天草測量ではないが、文化三年の徳山藩（毛利支藩）での測量を支援した役割や人数が記録されているので簡略して紹介しよう。（『伊能忠敬測量隊』）

忠敬本隊についた人数57名。

賄い方御従目付藤井上下5名。

定付き廻り7名（大庄屋、庄屋、その部下など）。

村限り出勤3名（庄屋、地理案内人など）

町方人足4人（刀持ち、煙草盆持ちなどサービスマン）。

村方定人5人（縄張りなど測量手助け）。

村方一日限り人足13人（磁石持ち、駕籠夫、両縣持ち、鉄箱持

ち、槍持ち、棹持ち、床几持ち、腰掛・毛氈・薄縁持ち、茶

風呂持ち、手代わり)。

村方一日限り平人足20人(梵天、縄、杭などの作業夫)。

次に船団は。

右蚪丸(親船・浦船) 1艘・藩船手4人、浦舟子14人を始め、舢、台所船、水船、付き廻り役人船、人夫船、御附き廻りの賄船、御賄配船、測量道具船、小通い船、本船浦舟子の飯炊き船、町見船、茶船、小使船、歩み板積み船の合計21艘。これには30石船3艘を含む漁船など。また、浦舟子として計79人がいて、更に付属として、漕船19艘、浦舟子53人がいる。

全国測量で、これが標準だったか、特別だったかは分からないが、とにかく当時の仕事は、現在では考えられない人数や機材・用具を必要としていたということがよく分かる。この船団は、瀬戸内海の島々の測量のためだから、特異とも言えるだろうが、天草も島が多い為、これに類する船や人数を繰り出したことは容易に想像できる。

付いた人の役割を見ると、地理案内人は当たり前として、煙草盆持ちなど現在の常識からは考えられない役目を持った人までもが従事している。

これが、幕府のお偉いさんならともかく、侍とはいえ百姓身分上がりの与力格の忠敬に対する処遇だから、当時の

封建制社会の身分制度が、如何に激しかったかを物語っているともいえるようか。と、同時に、後に幕府を倒すことになる毛利藩が、この時点では、幕府に平身低頭していたことも窺える。

もつとも、このことで、忠敬の業績にケチをつける意図は、全く無い。

6日目 10月22日(九月二十四日)

測地・深海村 (天草市深海町)

久玉村 (天草市久玉町)

泊地・久玉村 (天草市久玉町)

《測》 朝曇り晴れ。

【伊能隊】(後手) 伊能、下河辺、青木、箱田、平助。

6時過ぎ、深海村出発。深海村より始め、浦河内、山ノ浦、浅海村(人家多し)、越路で先手と合流。(1

2・6km)

16時頃久玉村へ着く。

【坂部隊】(先手) 坂部、永井、上田、長蔵。

6時前深海村出発。

久玉村赤島一周。(1.3km) それより久玉村古田より始め逆測。同村山之浦、浅海村人家前を過ぎ越地で合流。(8.5km、外に早崎片測143m、合計9.9km)

16時頃久玉村へ着く。

本陣・大庄屋中原新吾。

坂部宿・医師西村仲貞。

下、青、永宿・百姓慶治。

夜中晴天、天文測量。

《巡》晴天

これまでの通り、5時深海村出発。

伊能勘解由様宿 久玉役座。

坂部貞兵衛さま宿 仲貞宅

三人様宿 慶次宅。

代官様宿 松太郎宅。

郡宿 新次宅。

16時久玉村着船。

この日の本陣は、久玉組久玉村大庄屋役宅。久玉組は、

外に牛深村、魚貫村、深海村、早浦村、亀浦村、宮野河内村の7村からなっている。宮野河内村を除き、旧牛深市域である。現在の感覚でいうと、大庄屋は牛深村に置かれそうだが、なぜ久玉村に置かれたのだろうか。ちなみに、『天草島鏡』による、文政十年(1827)年の村勢を両村比べてみると、村高は、久玉村が318石、牛深村が230石。人口は、久玉村が3512人、牛深村が669人。家数が久玉村が5322軒、牛深村が948軒。その他に定浦として、久玉の無高・舸子2人に対して、牛深村は85石・舸子33人と、村高を除いて牛深村が大きい。

久玉氏と久玉城

10月17日(九月十九日)大多尾村から測量を開始した、伊能測量隊は、6日目の22日久玉村に入った。

久玉村が誇るものと言えば、かつて歴史的に見て、久玉が付近の中心地であったということもあるだろう。中世の天草は、五人衆と言われる五氏の土豪が支配していたことは有名だが、少し時代を遡れば、さらに数氏がいた。その一人が久玉氏である。

久玉氏の全盛期は、15世紀から16世紀にかけてといわれ

る。日本の歴史区分からいうと、室町時代後半である。久玉氏は天文年間頃に、河内浦を中心に勢力を伸ばしてきた天草氏に併合され、消え去ってしまいが、最盛期の勢力はすごいものがあつたようだ。それは、久玉城址に見ることが出来る。その規模の大きさは、五人衆の居城をものぐからである。倉岳町棚底の棚底城址とともに、天草でただ二つだけ、県指定史跡となっている事からもそれは分かる。江戸時代になると、米中心の経済になるが、久玉氏の頃は、海を中心にした経済であつたようだ。久玉城の海側の端は、現在はずっかり干拓されているが、当時は、城端まで海であつたようで、城から直接海に乗り出し、交易をしたりあるいは海賊と言われる類だつたのかもしれない。久玉城は中世城としては珍しく石垣を持つた城であり、その意石垣の石も海の石を用いられているという。また、城跡に案内標柱が建てられているが、それを見ても立派な城であつたことが分かる。ただ近年の研究によると、城内の石垣は、後年寺沢期の者といわれているようだが。

鈴木代官による行政区割りの際には、まだその名残で、久玉が中心であつたのかもしれない。

◇久玉城址説明板より◇

熊本県指定史跡

久玉城跡

所在地 天草市久玉町

指定年月日 昭和48年3月28日

久玉城跡は、この地方の領主であつた久玉氏によって築かれた城と伝えられています。築城時期は定かではありませんが、明応十年（1501）に久玉氏が天草一揆中（天草の国人領主八氏による連合体）の一氏として数えられており、この頃すでに久玉城が居城として機能していたと考えられます。

久玉氏は16世紀前半に河内浦城を居城とする天草氏の傘下に入ったと考えられ、16世紀後半には久玉城は天草氏の支城として記録に見えています。

永禄十二年（1569）、天草氏はキリスト教を導入しようとする当主天草尚種（ドン・ミゲル）と導入に反対する2人の弟の間に内紛が発生し、久玉城は弟方に占拠されました。2人の弟は島津薩州家（島津義虎）や相良氏の支援を受け、天正二年（1574）まで久玉城に籠り抵抗しましたが、尚種に敗れ天草を追われました。これ以後、久玉城周辺でもキリスト教が広まり、宣教師の記録では天正八年（1580）に「司祭館が久玉城に作られ司祭1人が在住した」と記述されています。

関ヶ原の戦い後の慶長六年（1601）、天草は

唐津藩寺澤氏の飛地領となり、久玉城は寺澤氏によって大改修が施されました。曲輪①・②の周囲に見られる高石垣は、同じく寺澤氏の支城である獅子城跡（佐賀県唐津市）などの高石垣と共通を持つことから、江戸時代派な建築物があったと想定され、江戸時代初期の絵図『慶長肥後国絵図』に描かれた久玉城は天守閣風の櫓が表現されています。



久玉城址

城の頂部にあたる曲輪④・⑤には、土塁や土橋、切岸など中世城の様相を留めており、久玉氏・天草氏時代の遺構と考えられます。久玉城跡は中世城跡近代城跡、両者の遺構が良好に保存されている貴重な史跡です。

7日 10月23日（九月二十五日）

測地・久玉村（天草市久玉町）

泊地・牛深村（天草市牛深町）

《測》 朝曇り晴れ。

【伊能隊】（後手）伊能、下河辺、青木、箱田、長蔵。
7時出発。

久玉村より始め、逆に大野浦、黒岩まで測り、先手と合流。（8・5km）

【坂部隊】（先手）坂部、永井、上田、平助。
5時頃久玉村出発。
久玉村古田より始め、順測。右山に黒岩まで測り後手と合流。（2km）また、戸島一周（3・2km、人家なし、

疱瘡の捨て島。合計5・2km)

両手とも、12時頃、牛深村へ着く。

本陣・庄屋長岡記七郎・

脇宿・助七(天草で二、三の富家)。

この夜晴れ。天文測量。

《巡》晴天。

5時出発。

久玉村戸嶋、山ノ浦、古田より真込鼻まで測量済。直

ちに牛深へ14時ころ着船。

戸嶋は疱瘡山に付き、付添者は既往者を選ぶ。

伊能様宿・牛深村役座。

坂部、下河辺、青木、永井様宿・牛深村万屋助七宅。

代官様宿・薩摩屋。

大庄屋衆、庄屋衆宿・阿波屋。

其の一 助七

坂部以下の宿は、万屋助七宅。忠敬は、天草で二、三の富家と記している。富家、つまり銀主である。

ここで、銀主について学んでみよう。

『本渡市史』によると。

貧しいながらも牧歌的な農耕漁撈によって、天草の民は、原始古代以来自給自足の生活を続けてきた。しかし江戸時代中後期ともなると、貨幣による商品経済が浸透し普及しはじめる。我が国唯一の開港場として賑わう長崎に近い地理的条件が、その傾向に拍車をかけた。このような時代の波に乗って、天草では、酒造、回船、よろず商いなどの商工業者が、雨後の竹の子のように台頭した。潮来出島の節まわしで歌われたという当時の俚謡が、その繁栄ぶりを歌い上げている。

島で徳者は 大島さまよ 御領じゃ

石本勝之丞さま

島子じゃ 池田屋 三木屋さん

富岡町では大坂屋

西に廻れば 牛深の 助七さんの家造りは

銀主

あじな大工の 作りかけ
海の中まで かけ出して

夜昼 酒盛りや 耐えやせぬ

それでも 身上は 栄えます

そしてこれらの富豪は、みだれ押し of 家族を抱えて日々の暮らし向きに困る難儀者や、年貢米上納にもなにかと差し出し、支えた小前百姓たちに銀錢を貸し付け、質に取った田畑の地主としても大きく成長している。すなわち彼等は、金融資本家的大地主、場合によっては高利貸しとしても、土地の集積をすすめた。元の地主は、新しい地主の下作人に転落するが、天草の過剰人口が労賃単価の下落をもたらし、下作人たちは、高い上米にも甘んじるほかはなかった。(中略)天草では、公儀禁令らに抵触する土地の永代売買さえ行われていた。

(中略)

天明年間(1780年代)には、御領村の石本勝之丞や小山清四郎らを象徴的な存在とする、いわゆる銀主や徳者が、全郡280余軒を数え、郡中田畑の三分の二を占めるに至る。(中略)

天草では、富豪のことを徳者、あるいは銀主と呼ん

だが、銀主は「ぎんし」と発音されていた。

この俚謡に登場する小山清四郎(俚謡では大島さまとなっている)方では、11月7日(十月十一日)に昼食を取っている。後にも記すが、この日の日記には「百姓小山清四郎、家作大によし。苗字免許なり。新蕎麦を出す。同所百姓勝之丞と云者あり。当時、天草島第一の富豪なりと云う」と記している。

この他、宿泊宅の名前だけでは分からないが、たぶん何軒かの銀主宅に泊まっているかもしれない。

銀主にも、庶民にとつていい銀主と、悪い銀主がいたようである。この助七銀主は、悪い銀主に属したようだ。というのは、銀主の横暴に耐えかねた村人は、何度も銀主宅や庄屋宅の、打ち毀しや一揆を起こしているが、助七もその例外ではなかった。

その反面、御領村の大銀主、石本家や小山家はその被害を受けていない。それは、財力形成に天草の民人から収奪したというより、天下国家を相手にしていた事、さらには、天草の民人の危機に対して、度々助力をしていることからである。現在の言うなら、アメリカの大富豪の寄付と言えなくもない。ただ、これらについては、歴史的検証が必要かもしれないが。

助七宅への打ち毀しについて、『近代年譜』には、こう記されている。

《近》天明七年六月 牛深村銀主萬屋助七外四軒に、暴民大勢押しかけ家屋打ち毀し、器物はもとより債権書類一悉く焼却に及ぶ。

この事件は、伊能測量隊来島の23年前のことである。但しこの助七は、忠敬逗留時の助七の先代であるが、これで身上を潰すことなく、しぶとくさらに発展しているようである。

前出の里謡に注目すると、助七は苗字がない。いや苗字は持っているも公式に名乗れなかった。対して同じような財力を持つ、小山や石本は苗字で謡われている。これは何を意味するかというと、当時農民身分の苗字は公式に名乗れなかったが、為政者（幕府）の許可があれば、名乗ることが出来た。ただ、時代を経ることを必要としたが。

その苗字を公式に一括して名乗れるようになった場合がある。それは、大庄屋や庄屋に対しての、苗字御免だ。そして、個別には、財力を基に、幕府に貢献したり、民



銀主 牛深浦田家（助七）の屋敷郡 明治時代

屋敷地が1000坪、その3分の1が母屋で、土蔵が10棟もあった。

（「図説 天草の歴史」より。）

里謡に、「西に廻れば牛深の 助七様の家作りは あじな大工の作りかけ、海の中までかけ出して、夜昼酒盛り絶間なし、それでも身上栄えます」と謡われている。

人に対しての財力支援などの貢献に対しての褒美的意味合いがある。

測量隊は、22日目の11月7日に、御領村に入った。富岡が天草の行政の中心なら、経済の中心と言っても過言でないくらいに、御領から全国へと経済的進出をしていた。その中心となったのが、銀主小山家と石本家だ。

其の二 小山家

伊能隊の昼食は、銀主小山清四郎宅。《測》では、「新蕎麦を出」となっているが、《巡》では、蕎麦の外に盃が出たことが記してある。酒を忠敬が飲んだかどうかは分からないが、さすが測量日記には盃が出たとは書けない。

この小山家は、国民屋くたみと称し、天草でも石本家と天草でも一二を争う銀主であった。清四郎の祖父清兵衛は、安永七年（1718）に、毎々年凶荒時に救穀米を差し出し、奇特とあって、公儀より褒美銀十枚を下賜され、子孫までの苗字名乗りを許されている。清四郎（1778-1836）は銀主としての仕事だけでなく、正倫社という私塾を開いて子弟に教えている。また、弘化四年（1847）、第二の天草の乱とも呼ばれる、銀主宅や庄屋宅の打ち毀しの大

規模な百姓一揆が起きたが、小山家は石本家とともに、度々の救穀米差出などにより、打ち毀しを免れている。子に、後に長崎の外国人居留地を干拓した北野織部、長崎端島炭鉱等を経営したり、グラバー邸 大浦天主堂（国宝）を建設した小山秀之進（秀）がいる。

其の三 石本家・石本平兵衛

石本家は日本の西海果ての僻村にあつて、一時、三井・住友・鴻池と並ぶ日本の大富豪となり、幕府御用達まで昇りつめた。石本家最盛期の石本勝之丞平兵衛はその才により商業資本家として屈指の財力を築く。

しかし、当時の多くの銀主と違い決して庶民を踏み倒して伸したのではない。逆に困窮する農民庶民に数度の多額の援助を行う。その功により、支配者から何度も褒美を賜る。勿論、弘化一揆でも、打ち毀しの対象外。苗字御免、帯刀御免更に幕府の御用達になるなど、日の出の勢いであったが、出る杭は打たれる。

高嶋秋帆を後援した廉で石本平兵衛・勝之丞の父子は水野忠邦・鳥居耀蔵によって陥られ捕えられ獄死する。

哀れかな、流石の豪商石本家も没落、今はただ、豪壮な

石垣のみが当時の勢いを象徴するかのようには遺すのみ。

以下、石本家元屋敷にある石本平兵衛顕彰碑の碑文をかりて説明に替えたい。

翁（石本平兵衛）は、天明七年（1787）御領村（現五和町）旧家石本家の長男として生まれ、幼少より神童の誉れ高く、少年時代は長崎に学び、語学、経済、財政、貿易等について学問を修め、その才覚はますます磨かれて卓抜、十一代將軍家斉の時世に豪商松坂屋としてこの地より世に出た。

翁は、大いに手腕を發揮して、わが国海外貿易業界の雄となり、また国内企業ならびに金融大資本家としても、当時の三井、住友、鴻池等の三大財閥と比肩するに至った。

翁は、その財政手腕が認められ、天保五年（1834）旧二月二四日、幕府勘定所御用達を拝命、大名なみの待遇を受けた。

従来石本家は、九州各藩の財政顧問的地位にあり、年貢米その他産物の専売権を保有をもって巨大な経済力を形成し、全国大名への貸付金は常に百万兩を超えたという。



大名屋敷かと見間違ふほどの石垣を持つ、石本家屋敷 五和町御領

翁による難民救済の実績は、枚挙にいとまはないが、特に寛政年間から続いた天草地方の大飢饉は、文化天保の時代にも及び、農民の困窮はその極に達した。

この窮状をみた翁は、文化二年（1805）被災地に対し、粃2百石、丁錢三千貫を贈り、次いで文化八年より天保五年までの二十二年間に、天草を始め、長崎、宇佐、江戸等の各地に贈った義捐救済米は実に一万一

千石以上、丁錢一万八千貫余(現在換算金約二十二億円)を贈るなど、巨額の私財を投じて、救世済民に精魂を傾けている。

翁は 天保十四年(1843)旧三月二十八日病を得て五十七歳の生涯を閉じた。

◇参考資料

『石本平兵衛傳』白倉忠明 自家本

『天草の豪商 石本平兵衛』河村哲夫 藤原書店

など

8日目 10月24日(九月二十六日)

測地・牛深村(天草市牛深町)

泊地・牛深村(天草市牛深町)

《測》 朝晴天

両隊とも6時前に出発。

【下河辺隊】(後手)下河辺、青木、箱田、平助。

黒島一周(1.3km)。その後下須島瀬戸脇より始め、

涼松まで測る(8.5km)。合計9.8km。

【坂部隊】(先手)坂部、永井、上田、長蔵。

牛深村桑島一周(2.1km)。矢島(大島?)一周(3.3km)。合計5.3km。

坂部隊14時、下河辺隊16時帰宿。

宿は前日同。

夜晴天。天文測量。

《巡》 晴天

5時出発。

今日は伊能様お休み。坂部隊は測量。

代官様も休息。

15時頃両手共帰宿。

9日目 10月25日(九月二十七日)

測地・牛深村(天草市牛深町)

泊地・牛深村(天草市牛深町)

《測》 朝晴天。

両隊とも6時ころ出発。

【下河辺隊】（後手）下河辺、青木、箱田、平助。

下須島瀬戸脇より始め、右山に添、天附（人家あり）、元下須（人家あり）涼松昨日の残印まで測り、下須島一周終わる。（今日分11・2km、下須島周回19・8km、瀬戸渡し幅75m）
15時帰宿。

【坂部隊】（先手）坂部、永井、上田、長蔵。

築島一周測（1・7km、人家なし、疱瘡人捨島）。宝島（法ヶ島、伊能図では寶ヶ島）一周測（2・3km、人家なし、疱瘡人捨て場）。牛島一周測（1・7km、時間なし）。三島合計、5・8km。

13時帰宿。

宿泊は昨日同。

この夜も晴天。天文測量。

この日も忠敬は休みのようだ。

5時出発。前日と同じ15時頃帰宿。

夜分天文考有。

高浜村庄屋（宜珍）病気により帰村。

《宜》拙者（宜珍）風邪にてお付き添い出来かねに付き牛深より引き取り。

疱瘡の島

捨て島か隔離島か

忠敬は、築島や宝島を「疱瘡人捨島・疱瘡捨場」と記しているが、村人の名譽のために一言付け加えると。決して村人は、疱瘡罹患者をおぼ捨山のように捨てたのではない。隔離したのである。隔離島には、看病人を入れ、食糧を運び入れている。さらに、できるだけの治療を行ったこともある。ただ、疱瘡は当時もつとも恐れられた病気であり、治療方法が無く、自然治癒に頼らねばならなかったため、結果的に捨てられたこともあったかもしれないが。

《巡》晴天。

疱瘡は種痘が普及するまで、天草に於いても何度も流行している。その様子が詳しく分かるのが、『上田宜珍日記

文化四年・五年』である。この年は、高浜村で疱瘡が大流行し、庄屋上田宜珍は、対策に翻弄されている。疱瘡の発端は、十一月二十八日に死去した漁師の慶助の葬儀である。宜珍は十二月十二日に次のように記している。(意訳)

諏訪筋慶助、先月二十八日に相果てた時、身近に立ち寄った共同所に12軒、人数にして20人が病気になる。そのうち4人は出物があり疱瘡と見られた。そのためそのことを会所に申し出る。もつとも傷寒(腸チフス)とも思えたが、親類のうち患った者を一通り見たところ、疱瘡に間違いないと見えた。……。

慶助は弁指であったので、葬儀には高浜の中心地からも多くの人が参列した。その参列者20人が最初に患い、たちまち全村に拡大した。

地区では、この罹患者を山小屋へ隔離した。十四日には8軒が山小屋へ送られた。翌十五日には、12軒、人数にして40人余が山入りする。

宜珍は、熊本藩下益城の医者で、天草に住んでいた宮田賢育を山小屋に遣わし、手当をした。

その後も病人は増え、二十五日の富岡への届けでは、病人80人(男39人、女41人)、死去16人となった。その看護人として、120人を付添として出している。また、感染の疑いがあるが、罹患していない者が101人いるとして



疱瘡の隔離島・下馬刀島 天草市深海町
この島は、5日目の10月21日に測量(遠測)している。

いる。

疱瘡患者を捨てていないということが、これでも分かるが、村内外からたくさんさんの支援が届いている。資料(「近世肥後国における疱瘡対策―山小屋と他国養生―」東昇[≡]田)によると、この支援物資が一覧表にまとめられている。

支援物資は、カライモや粃、味噌、塩などの食料品、金銭で、他村からも多く、中には御領大島の銀主国民屋からも粃7俵が送られている。

このように、疱瘡が流行った場合、郡をあげて、互いに助け合っていることが分かる。

五月十九日の日記には。

二月十七日より三月七日まで山小屋へ送った人数として、病人15人、死去12人。快気した人は3人だけということが記してある。また、またその前の四月二十四日には、疱瘡で亡くなった人を供養している。

疱瘡死失人供養。開運和尚船よりお出で。外平海岸で執行。卒塔婆長さ2間半、幅5寸、厚さ4寸。83霊の戒名を記し建てる。お布施150匁、内100目は慶助の志。50匁は諏訪中で亡くなった人の家々より取り集める。その他入用の分村方より出す。

このように猛威を奮った疱瘡も、翌年の五月二十三日をもって、最後の山小屋の一人が帰り、終息した。

宜珍一旦離隊

宜珍は、この日病気を理由に高浜村へ帰っている。軽い病気であったのは確かだと思うが、長く村を留守にしてい

るので、心配もあつたらうし、また、これから測量隊を高浜に受け入れるので、その準備のためかもしれない。

宜珍が再び測量隊と合流するのは、9日後の11月3日である。ただし、巡廻日記は、以後も続いている。

当時の牛深は

牛深の測量には、5日も費やしている。これは島が多かつたためだ。陸の測量と違って、島の測量は大変な労苦があつたようだ。

また当時の牛深はどのような様子だったのだろうか。

伊能測量から48年後の1858年（安政五年）、長崎海軍伝習所の教官として、訓練で牛深を訪れたカッテンディーケは牛深の印象を次のように記している。

「6月27日は日曜日に当たったが、その日、我々は鹿兒島を出発して山川港まで帰ったが、鵬翔丸は既にそこから江戸に出帆していた。翌朝我々は天草へ進航した。天草島ではその東海岸の首都天草を視察して、もっと詳しく知りたいと思っていたところである。伝習所長は私の意見に反対し、非常に景色がよいと人の言う、

同島の牛深という他の港へ行こうと主張したので、その主張に従い、同夜遅くその天草島の南端に位する小さな港に入ったが、来てみれば、その牛深は見すばらしい寒村で、付近は一面赤肌の山ばかりで、別に目を惹くような何物もないので、少なからず期待を裏切られ失望した。そこは極く小さな舟には良い港であるが、威臨丸のような西洋型船は、荒天の時などには心配しなればならない。その夜半あいにくと荒模様となり、午前1時見張り番は眠っていた私を呼び起こして、船尾と陸との間隔が、僅か8フィートしかないと告げたときには、実に心配でたまらなかつた。船はグルグル回つて或る巖の前に押し流されたので、突き当たらないようにと、錨を卸ろしたが、不思議や微塵の損傷も受けなかつた。

『長崎海軍伝習所の日々』 カッテンデイク著
水田信利訳 東洋文庫刊より

牛深と言えば、「ハイヤ節・踊り」に象徴されるといっても過言ではない。

カッテンデイクは、牛深は見すばらしい寒村と評しているが、かなり賑やかな港町であつたとも言われている。

それは牛深は漁業基地の面と、西廻り航路の風待ち港としての面を持つという。

牛深は、定浦としても舸子数が37人、浦高が185石と天草最大である。また人口も6669人と天草最大の人口であつた。ちなみに、人口の二位は御領村(5139人)であり、本渡は当時の村、本戸馬場村と町山口村を合わせても、4459人である。当時の天草を代表する銀主、助七が存在していたことから、それは容易に理解できる。

カッテンデイクにしてみれば、神戸や長崎と比較して寒村と表現したのであろう。

当時の船は徳川幕府の令により、外洋航海に適さない船しか造れなかつたので、海岸線を縫うように走らざるを得なかつた。それでも、風波が強ければ、港々に風よけをする必要があつた。牛深は、薩摩から大坂へ目指す航路に位置しており、しばしばその寄港地として利用されたらしい。風待ちは、一日の時もあり数日の時もある。そんな風待ちの無聊を慰めたのが宴席であつた。そして、その宴席を賑やかにするために、生まれたのがハイヤ節であつた。ただ、歴史的検証として、江戸時代に生まれたと言うが、江戸時代の何時なのか、何時生まれたのか、誰が作ったのかは歴史の闇の中である。

そして、この牛深を発祥とした陽気なハイヤ節は、船乗

り達によって、全国へ伝搬し、今でも日本各地で、唄われ踊られている。

ハイヤエー ハイヤ。

南国特有な、日本にはある意味似つかわしくないこの歌が、天草牛深を発祥とし、全国へ伝搬したことは、天草人の誇りである。

カッテンディークが、もし宴席でこのハイヤ踊りを体験したなら、牛深の印象はもつと違っていたかもしれない。また、我が伊能忠敬も、牛深に4泊もしているのだから、ちよつと骨休めに宴席に出て、先生も一緒に踊りましょう、などとはやされたとしたら、測量の旅も楽しかったろうに思う。でも真面目な伊能先生は、誘われても宴席に出ることはなかったかもしれないが。ただ、伊能測量当時、このハイヤ節が唄われていたかどうかは定かでない。

10日目 10月26日(九月二十八日)

測地・牛深村 (天草市牛深町)

久玉村 (〃〃)

泊地・牛深村 (天草市牛深町)

《測》

朝より晴天。



昭和初年頃の牛深

『天草写真大観』 吉見教英著作兼発行 みくに社刊 昭和十年一月廿五日発行

昭和時代とはいえ、現在の牛深とはずいぶん違う。

《巡》晴天

【伊能隊】（後手）伊能、下河辺、青木、箱田、平助。
6時30分ころ出発。
久玉村測所より始め、順測。吉田、牛深村鍛冶屋町^〇印に繋ぎ、宮崎まで測る（7・2 km）。

【坂部隊】（先手）坂部、永井、上田、長蔵。
6時出発。

牛深村の内鶴首より始め、逆測。宮崎にて後手と合測（4・9 km、内宮崎横切54 m引き）。ほかに牛深村鍛冶屋町^〇印より宮崎鬼塚まで横切（376 m）。

両手共、宮崎八幡宮拝殿にて昼食。
それより銀杏山（遠見番所あり）へ登り山島を測る。
14時頃帰宿。宿前夜同。

面会。志岐組大庄屋平井為五郎。

上津深江村庄屋山川恵兵衛。

この夜も晴天だが、前夜観測のため不測。
宿、前夜同。

久玉村役座元より牛深村内海辺鶴崎廻り鶴の首まで測量済。10時頃より銀杏山へ登る。伊能様始め、付添衆残らず共をする。
14時前帰宿。
志岐組大庄屋上津深江庄屋牛深村まで出向き伺い。
久玉村大庄屋病気により引き取り。

久玉村大庄屋 中原新吾

牛深測量中の10月26日（九月二十八日）の《巡》によれば、「久玉村大庄屋病気ニ付引取」とある。さらに、御領から本渡にかけての測量中の11月8日（十月十二日）には、「久玉村大庄屋病気ニ付町山口村方引取二成」とある。その前の10月31日（十月四日）には「久玉村大庄屋下田御泊ニ出勤付添」とあり、病気が快復したためか、少し良くなったためか、再度付添をしている。

その中原新吾は、天草測量が終わって間もなくの十二月三日（陽曆12月28日）病気で亡くなっている。

年40歳の若さであった。病名は分からないが、測量方への付添人としての気苦労と肉体的疲労が、遠因となったの

かもしれない。また、病気を抱えていたが付添役を持たされたのかもしれない。中原新吾には申し訳ないが、この測量に当たっては、影の薄い存在であったことは否定できない。

ただ、この死亡については、天草近代年譜にも記載がない。宜珍日記には、「十二月六日、久玉中原氏悔二立会才作代福二郎遣ス」とそっけなく記してあるのみ。共に測量隊の付添役として同道し、かつ大庄屋として庄屋の上役（組は違うが）としての、中原氏の死に対しては、やや冷たい感じがする。中原新吾の墓は、久玉無量寺の中原家の墓地にある。若年にして亡くなったにしては、墓石は他より大きい。法名は「泰嶽院巖與勇俊義道居士」。碑銘は江上芥州。死去年月日はその碑銘によった。



中原新吾の墓
久玉町無量寺墓地

地役人 遠見番と山方役

10日目の測量日記に「銀杏山（遠見番所あり）へ登り山島を測」とある。江戸時代の天草には、富岡代官所の指揮下に、本役人の人員不足を補うため、地元から採用した地役人（武士身分）が置かれていた。遠見番と山方役である。

遠見番

遠見番とは、天草を海防の要として、遠見番所を設置し、その番所に地役人を配置した役人である。

鈴木重成は、寛永十八年（1641）、富岡、大江、魚貫崎の3ヶ所に、遠見番所を設け、遠見番8名を配置した。

遠見役人配置の内訳は、富岡4名、大江2名、魚貫崎2名である。

さらに、日田代官兼任支配の享保二年（1717）、崎津、牛深の2か所を増設した。ただし、遠見番定員は変わらず、富岡2名、大江1名、崎津2名、魚貫崎1名、牛深2名の配置である。

遠見番の職掌

- ① 南蛮船の来航監視、密貿易の取締り、漂着船の処理

- ② 難波船の救助
- ③ 旅船、旅人の入出島の管理
- ④ 造船、解船、売船の監督
- ⑤ 浦方に関する違法行為の摘発。

山方役

山方役は、延宝元年(1673)、小川藤左衛門代官の時に置かれた。

配置、および人員は次の通り。

富岡付 5名

崎津付 5名

亀川付 5名

元禄三年(1690)、内野河内に番所を増設。

富岡付6名、崎津付3名、亀川付3名、内野河内付2名、計14名に拡充。残り1名は、肥前御料林担当・茂木村詰として派遣し、年貢回米の折りには、長崎勤務を兼ねさせた。元禄六年(1693)、富岡付、内野河内付をそれぞれ1名増員。

明和七年(1770)、西国郡代兼任時代、山方役は、4名に削減。(遠見番8名はそのまま)

その代り、大庄屋(10名)に、山方役の下役を仰せつけた。役目としては、山林の管理と運上取立てに当たらせると

ともに、遠見番の補完、更には天草郡の治安をも任じていた。

山方役の主な職掌

- ① 竹木や薪の運上取立
- ② 野焼き山焼きの監督
- ③ 幕府直営林(御林・官山・留山||福連木)の管理
- ④ 民有林、竹木伐採の取締まり
- ⑤ 遠見番管轄地域外の難破船救助
- ⑥ 唐蘭船漂着の際、遠見番への支援
- ⑦ 管轄内の保安警察事務

遠見番は、外国船の見張及び長崎への連絡のため烽火場(当時は放火場と言っていた)が設けられていた。その復元が、牛深遠見山、魚貫崎遠見岳、高浜荒尾岳に作られている。また、遠見番所跡が、遠見山中腹にある。

江戸時代も宜珍の時代近くになると、外国船の来航などが相次ぎ、海防を強化するため、この遠見番だけでは足りなく、庄屋をトップとした村全体で、遠見番の役目を担っていたようだ。これは、宜珍日記を見ると、かなりの負担となっていたことがよく分かる。

11日 10月27日(九月二十九日)

測地・牛深村 (天草市牛深町)

魚貫村 (天草市魚貫町)

泊地・魚貫村 (天草市魚貫町)

《測》 朝晴天。

【坂部隊】 (先手) 坂部、永井、箱田、平助。

5時頃牛深村出發。

茂串、浦ノ新田より始め、茂串(人家多し・湊)、魚貫村下を通過、福津入江南側まで測量。津印を残す。

(6・5 km、外に福津入江東側片打1・6 km、合計8・1 km)。

13時頃魚貫村到着。

【伊能隊】 (後手) 伊能、下河辺、上田、長蔵。

6時頃牛深村出發。牛深村鶴首(又、大首)より始め、先手測量開始点、浦ノ新田まで測る。(7・9 km、早崎横切147 m)。

12時半魚貫村に到着。

本陣、庄屋佐々木覚右衛門、

脇宿、百姓寅四郎。

この夜曇天のため不測。

《巡》 晴天

牛深村を5時出發。両手に分かれ、伊能様隊は鶴の首より茂串の二また浦迄、坂部様隊は二また浦より魚貫村浦越まで済む。

15時帰着。

伊能様宿・魚貫村役座。

坂部、下河辺、青木、永井様宿・魚貫村寅四郎宅。

代官様宿・同村富右衛門宅。

大庄屋、庄屋宿・同村覚次郎宅。

12日 10月28日 (十月朔日)

測地・魚貫村 (天草市魚貫町)

泊地・魚貫村 (天草市魚貫町)

《測》 朝曇り晴れ。

【坂部隊】 (先手) 坂部、下河辺、永井、長蔵。

6時出発。

魚貫村大首より始める。逆に魚貫崎を回り、鳶巢入江にて後手と合流。(6・2km)。

【伊能隊】(後手)伊能、青木、上田、箱田、平助。

7時頃出発。

魚貫村(津)印始め、福津浦入江(西側入口より半側0・8km)。また(津)印より始め、表海辺を測る。さらに鳶巢入江里浦まで測り、先手と合流。(8・1km、合計9km)。

両手共14時頃帰宿。

宿は前夜と同じ。

この夜晴れ、天文測量。

《巡》晴天。

5時頃出立。

魚貫村の内大首まで測量が済む。14時魚貫村へ帰着。天文観測あり。

《宜》晴れ 北風。

測量方聞きあい魚貫まで飛脚を出す。

《測》と《巡》の時刻表示方法が違うので、現在時刻に換算するときは、苦慮する。《測》には、先手六ツ前、後手六ツ頃出立と記してある。明け六ツは6時台、六ツ半は7時台である。また、《巡》には、寅刻より御出立、と記している。寅刻は4時から6時までの2時間である。したがって、以後、《測》と《巡》では時刻の食い違いがあるが、それはこのような理由があることをお含みおきたい。

13日目 10月29日(十月二日)

測地・亀浦村(天草市二浦町)など

泊地・亀浦村(天草市二浦町)

《測》朝大曇り。

【坂部隊】(先手)坂部、下河辺、箱田、平助。

6時出発。

大江村飛地小鍋より始める。崎津村飛地、それより本日宿泊の亀浦村宿を過ぎ、口ケ鼻迄測る。(7・4km)。13時亀浦村着。

【伊能隊】（後手）伊能、青木、上田、永井、長蔵。

7時頃出発。

魚貫村大首より始める。大江村飛地小鍋、先手測量開始点まで測る。（7・3km）。

14時頃亀浦村着

本陣・庄屋倉田武左衛門。

脇宿・茂七郎。

この夜宵曇り。22時より雨、23時30分頃止める。

《巡》晴天 14時ころより雨が降り出し夜半止む。

5時より出発。魚貫村の内大首より測量を始まり、亀浦村まで済む。15時頃宿に着く。

伊能様宿・亀浦村役座。

坂部様他3人・亀浦村茂七郎宅。

代官様宿・同村亀吉宅。

付廻り衆宿・亀浦村庵。

《宜》曇り 東風

測量方に出す茶を貰いに内野へ飛脚。

測量方が乗る船、橋船、荷物船とも残らず、当村（高浜村）で出すので、加勢不要とのことを、酒井氏（都呂々村庄屋）へ出す。

その返書一番鶏が鳴く頃に到来。

羊角湾

牛深の測量を終えた一行は、今度は天草下島西海岸を北上する。

茂串、魚貫村、早浦村、亀浦村、そして一町田村へと進む。特徴的なことは、現在の二浦町の羊角湾沿いに、飛地が多いことだ。伊能図には、村の境界が描かれていないが、測量日記には、湾対岸の大江村、崎津村、今富村の飛地を測量したとある。その飛地は現在もそのままのようだ。これは、漁業権の関係によるものだろうか。ただ、漁業権は、御上の定浦制によって、勝手に村どうしでは決められなく、飛地が出来た経緯は不明だ。

また、測量日記にも伊能図にも、羊角湾という、地名は出てこないが、既に羊角湾という地名は存在していたようだ。というのも、上田宜珍の「天草島鏡」にも、次のように書かれているからだ。

天草郡郷名 志記

今志岐と書今の志岐組より大江組の半に懸り井手組領組則一郷なり案るに志岐崎高崎魚貫崎此三ヶ所皆唐海に指向たる出鼻なり高崎は高浜の内にて高崎より海上十丁程西の洋中を大ヶ瀬と云高浜の内也それより西南にあたり一里程隔り小ヶ瀬と云石島あり大江村の内なり此二つの石島を唐土人は羊角嶼と唱へ渡海の節是を目当てに崎津の湊に入事也此事郷名には関はらされども唐土人の名付し崎故爰に記す

羊角湾の羊角は、湾の形が羊の角に似ているから名付けられたといわれているが、そうではなく、大ヶ瀬、小ヶ瀬が羊の角に似ていることから、此処を通って崎津港に入る中国人が名付けたことから、付けられた名前だという。

ただ、これは、二つの島から名付けられたので、それが湾の名前になった経緯は不明だ。

14日目 10月30日(十月三日)

測地・今富村 (天草市河浦町)

亀浦村 (天草市二浦町) など

泊地・下田村 (天草市河浦町)

《測》 朝大曇り。

先後手とも7時出発。

【坂部隊】 (先手) 坂部、下河辺、永井、長蔵。

箱崎(崎津村と今富村の境界争い地、したがって村名省略)より始める。左山に添え、今富村飛地鎌まで測る。(6・4km)。

【伊能隊】 (後手) 伊能、青木、上田、箱田、平助。

亀浦村口ヶ鼻より始め、大江村飛地、崎津村飛地、白岩(崎津村・今富村界)まで測る。(風波強く、途中で中止。4・1km)。

先後手12時前後下田村到着。(下田は一町田村の内。今は別村・庄屋有)

宿・浄土宗御証文天草山護国院崇円寺。
この夜曇りまた雨。

《巡》 晴天。

5時頃出発。

7時頃より雨少し降る。西風強し。夜雷雨。

亀浦村並びに崎津村飛地境より双方側共に小島を測量済む。小島の方の手合いは下田新田迄測量が済む。向こう側は残る。

小島と崎津の境二本松は今富庄屋と崎津村の者共と境の口論する。

伊能様ほか全員宿・下田村崇円寺。

代官様宿・庄屋宅。

付廻り衆宿・同村問屋次三郎宅。

村境界争いと宜珍

宜珍の巡廻日記に「小嶋と崎津之境二本松ニ而今富庄屋と崎津村之者共と境之口論致ス」とある。

封建社会の時代とはいえ、そこそこの自治権はあったようである。その一つの例が、村境の争いだ。争いのある地域の境界線は、領主が一方的に決めることも出来ず、村どうしの取り決めになっていた。

そのため、忠敬の測量で、一方的に村の境界を決められるのではないかという恐れが村にあり、測量に対しての危

惧があったという。但し、これは村人の誤解であったが、それは、忠敬の測量の意味を誤解したからである。それは、測量の資料として、各村へ絵図面や村内の間数、境目等の帳面を提出するよう命じられているためでもある。

その心配を払拭するために、今回の測量は、それらを決定するものでなく、かつ測量後境目等を決めることはないということ、富岡役所の今井、藤本両代官名で、口演という形で出されている。(木山家文書・四月晦日参照)

その意は、忠敬も、心得ており、村人に測量の本意を説いたり、境界争い地区は、穏便に測量を済ませたこともあったようだ。

ではなぜ、境界争いをしたかという点、現在ではどうでもいようなことだが、当時は、山は焚き木や肥料となる落ち葉などが、生活に直結する重要事であったためである。また、支配者が決めた漁業権益権はあったが、本格的な漁でない、いわゆる貝や海藻採りなどの浜稼ぎは、村の境界が、重要事であった。

天草で最大ともいえる村境の争い事は、「海老宇土村と対七ヶ村」の争いである。

海老宇土は、現在天草市栢宇土町の一集落である。住民

の方にとっては失礼だが、なんでこんな山の中の境界を争ったのかと思うが、当時は先に述べたように、生活に是非とも必要な地域であった。

したがって、境を接する七か村でその所有権を争い、さすがの役所もお手上げの状態であった。

その調停・解決を任されたのが、宜珍であった。なんで、関係ないはずの宜珍の登場？と思うが、当時この難問題を解決できる者は、宜珍の外にはいなかったということだろうか。

つまり、高浜村の一庄屋といえども、他村の事まで、つまり郡中の政治に参画する（させられる）必要があったということだ。

現在に直せば、天草市の市長が上天草市や荅北町の政治にも介入しなければならなかったともいえる。

そういう意味で、能力を買われた宜珍が、郡政全般にまで、手を差し伸べねばならなかったということを表している。それはつまり、幕府の政治体制が、絶対権力を持った独裁でなく、かなりの部分に、自治権があったということでもあろうか。

宜珍は、見事この期待に応え、この紛争を解決している。詳しくは、角田政治著『上田宜珍傳』第三章 宜珍の事業 第二項 各種紛争の仲裁・・・に詳しく述べられて

いるので、参照されたい。

また羊角湾の南岸は、亀浦村、早浦村かと思いきや、今富村、崎津村の飛地となっている。さらにその西側は大江村となっている。これは、早浦村と亀浦村が合併し二浦町となり、となった現在でも変わらないようだ。なぜ、今富、崎津、大江が対岸まで村域としたのか。疑問が残る。村の勢力の違い、あるいは漁業権の問題であろうか。

言葉の壁？

現在では、標準語（共通語）というものがあり、この標準語を使う限り、日本人同士話が通じないということはない。でも現在でも方言があり、方言で語られると、本意は通じてても正確には伝わらないことも多い。

先日、テレビで東北のお婆ちゃんが、東北弁で話していたが、筆者には全く理解できなかった。

もっとも筆者は、この方言という言葉は好きでなく、○言葉という表現を用いるようにしている。例えば天草の場合は、天草言葉というように。

その天草言葉でも、所によって微妙に違うことがある。それは、天草島原の乱で村が消滅した地域もあるなど、人

口が激減したため、各地から多くの人々が移住したためである。もっともその言葉やアクセントで、話を通じないということではないが。

さて、その言葉の壁が、伊能忠敬測量隊と、天草人との会話が、どれくらい通じていたかということである。

勿論当時は、標準語というものはなかった。更に国（藩）という垣根もあり、同じ国でも、ちよつと区域が違うと、それぞれのお国言葉で話していたことは間違いない。

さらに、ややこしくしていたのが、身分による言語の違い。武士が使う言葉と、庶民が使う言葉は違っていた。意が通じたかどうかは別としても、こうしたことも言葉の壁の一つであろう。

こうした、言葉の壁を、時代劇などで見ることはない。諛りも含め、それなりに工夫して地方言葉を表現していることはあるが、ドラマの中では、ちゃんと相手に通じている。

伊能忠敬の天草測量は、地元民の協力なくしては、絶対に不可能であった。例えば、「あの島の名は」「この地名は」と言ったことから、宿の事、世話してくれる人の名前など、コミニケが欠かせなかった。したがって江戸人の測量隊と天草人との会話は、測量をいかに正確に、かつス

ムーズに運ぶためには、もっとも大切な要素であったはずである。

それは、天草一の知識人である上田宜珍でも、江戸語？が話せるほどスムーズでなかったことは間違いない。もっとも宜珍の先祖は、真田の家来であったことから、中央には近いが。それでも恐らく、宜珍も精一杯の言葉で、忠敬と会話したことは容易に想像できる。

残念ながら、そうした対話の実況は勿論、その会話の行き違いや苦労話は、《測》にも《巡》にも記録されていない。

でも、長年全国を歩いた忠敬の事、その言葉の壁は、意外になかったのかもしれない。